

## はじめに

「国内世論はだいたい国有化支持で足並みを揃えたのではないでしょうか」。

洋食のテーブルをはさんで、霞ヶ関のある官僚が口を開いた。政府が尖閣国有化方針を明らかにした7月の暑い日だった。

大手メディアは、東京都が購入するより国有化するほうが中国との摩擦は少ないと読み、国有化支持を打ち出していた。だが中国は、国有化に対しても撤回要求の強硬姿勢を崩さず、先がはつきり見えない頃である。

「中国は本気で奪うつもりなのだろうか」と問うと、彼はすこし考えた後「このままいけばとってこようとすることもありません」。さらに「尖閣を差し上げれば、次は与那国や沖縄本島まで差し上げることになるが、それでもいいのかと聞けば、多くの人は黙ってしまう」。

霞ヶ関の中心にいる官僚が、仮定の話に基づいて「領土をとられてもいいのか」という論理をふりかざす。語り口は柔らかだが、あの前知事の論理構造とほとんど変わらない。こう問われれば、多くの人は「それは、ちよつと困るけど……」と反応するだろう。

この反応こそ、メーン・テーマの「領土ナショナリズムの魔力」である。

この魔力はまず、「とられるかもしれない」という被害者意識を誘発し、「とられてはならない」との反射的

回答を瞬時に引き出す。思考ではなく反射ゲームのキーワードだ。問題の領土が「本当にわれわれのものなのか」「かれらに理はないのか」という思考を経たものではないからだ。

本書はまず第一章で、都知事の挑発を契機に、国有化によって爆発した今回の日中対立を整理した。第二章では、歴史をふりかえり、関係者の主張を可能な限り紹介しよう努めた。

第三章では、なぜこれほど不毛な対立をもたらしたのかを、国際関係や国内要因から探った。領土問題を単なる「反射ゲーム」の世界におしとどめず、「かれら」の立場に立つて考える必要があるからである。

領土ナシヨナリズムの魔力は、われわれの思考を国家主権という「絶対的価値」に囲い込む。「われわれ」と「かれら」の利益は常に相反し、われわれの利益こそが「国益」であり、かれらの利益に与くみすれば「利敵行為」や「国賊」と非難される。単純化された「二択論」に第三の答えはない。

しかし、地球が小さくなり隣国との相互依存関係が深まれば、国家主権だけが百数十年前と同じ絶対性を維持することはできない。境界を超えて文化と人がつながり、共有された意識が広がると、偏狭な国家主権は溶かされていく。あの知事をはじめ、各国のリーダーが国家主義の旗を振る姿にドンキホーテを見る滑稽さを感じるのはそのためであろう。多くの人はその滑稽さに気づいてはいるが、「魔力」からは自由ではない。

第四章では「魔力」を解き放つ努力として、現状維持という「第三の道」によって改善した中台の兩岸関係を取り上げた。また良好な日中関係こそ地域の安定のカギを握ると分析する米識者の観点を紹介。尖閣を含む東シナ海が、豊かな共通生活圈だった歴史に学びながら、主権を棚上げして資源を共同利用する共通生活圈にする必要を強調した。

国家主権を相対化する想像力こそが、「魔力」から自由になるカギである。